

ル補助ヲ受ケタリ仍テ謹ンテ其厚意ヲ謝ス

抄録

●猿化牛痘苗の研究

醫學士野田忠廣氏は人体に最も近似せる高等動物猿により「一定量の人化痘漿を猿に接種して十數倍量の人漿猿化物を採収し之と原漿として代用し得るや」及び「牛痘苗を猿に接種して一定量の牛漿猿化物を採収し之を厚漿として代用し得る」やの二問題おつき精密なる研究を遂げ左の如く論結ありたり

第一 人漿及び牛漿を猿体お接種したる發痘狀況と人体接種と異ふることなし

第二 人漿及び牛漿の猿化痘漿は人化痘漿と近似したる性質を具有す

第三 貴重なる人化痘漿は猿体通過の爲め、其効力を減退せらるゝことなく十數倍以上の増量せられ得べし

第四 猿化痘漿を原漿として調製したる牛痘苗ハ普通の一傳牛痘苗と効力を等ふし而して二傳牛

痘苗に比すれば遙に優れり

第五 前項の猿化牛痘苗は少くも二ヶ月以上完全なる効力を保有す貯藏法に注意を加ふるとき四ヶ月以上有効なり

而して猿體は痘質採収後剖檢に依て其健康を確証し得るを以て爲めに危害と生するの恐なく人體より採漿するに比すれば寧ろ安全なるの利ありと謂つべし

以上記述したる處に依れば余が解釋せんと企てたる二問題に總て積極的好果と結びたるものとす但し猿體の供給充分ならず猿體種繼に關する問題未決なるが故に猿と以て悉く未種痘小兒に代用すること能はざると雖も人化痘漿の供給不及の場合に於て猿體に依て之と十數倍に増量し得べく又未種痘小兒の欠乏に際しては猿體に就て採収したる牛漿猿化物を以て人化痘漿に代用し得べし即ち牛痘苗製造事業に是に依て從來の困難を軽減せられ而して異常過大の需用あるも能く之を充たすに足るべしと云々

●胃の機能検査上「ヨジピン」の應用

Dr. Ferdinand Winkler in Dr. Conrad Stein

吾人は腸管内に於ける脂肪分解性と單簡に証明せんが爲め内用として沃度脂肪と與ふと良とす

「ハ、ウインテルニッツ」H. Winternitz 氏は Hubl 氏の實驗せし脂肪鑑定法より基き器管内より於ける沃度と脂肪の集合産物の關係と研究せんとし「ヨシピン」Iodipin なる製劑を用ひたり「ヨシピン」と沃度と「ゼザム油」の化學物として E. Marek 商會より販賣せらるゝ者なり

「ヨシピン」と生理的検査に依るに健全なる胃液も久しく作用せし後は沃度脂肪より沃度と有離し得ず之れに反し胆汁液と容易に沃度を有離し得る者なり

治療的には幾多の學者は應用せしと雖も尙胃の運動検査併に胆汁液の力を鑑識するか爲め診斷的にお用られ「ザロール」検査の如く幽門の通過時間と檢するにあり

「ウインテルニッツ」氏は攝取后二十分にして尿中にお檢出し「フレーゼ」氏は之れ吾人諸器管作用の最も迅速なるものとせり著者は獨り尿中のみならず亦唾液中におも檢出し得之れか検査にハ Boinget 氏の澱粉紙を用へたり此の試験紙は新製せる澱粉紙を暗室内にて五%硫化アンモニヤを以て濕潤せしむ而して毎十五分毎に唾液を其の一片に唾下せしめ確實に時間と明記す沃度の量僅微なる時は青色よして著しき暗青色に及ぶ

著者は「ヨシピン」に薄荷油其他揮發油を少計加へ一杯の珈琲又は牛乳及白パンよりなる朝食の後十五乃至三十分時に一茶七の「ヨシピン」を與へたり之れより腸に障害を及ぼす事なしと著者は四十六回の實驗より左の成績を得たり

凡て健康人の沃度の反應、唾液、液中に現出する早きは十五分、遅きは四十五分、時にして沃度反應若し、一時間餘にして來るときは胃の機能障害と認知するを得と

著者之胃弛緩症、胃擴張症及著しき胃擴張兼胃癌患者にして反應四時間後より現はれしものを實驗せり

今次に著者實驗四十六の中主要なるもの二三と列記す

年齢	診断	反應時間
1 二十六才	神經衰弱症	十五分時
2 二十二才	肺結核	三十分時
3 五十一才	十二指腸潰瘍	三十分時
4 六十一才	肝癌腫	三十分時
5 二十九才	神經衰弱症	三十分時
6 四十八才	心臟病	三十分時
7 三十才	急性胃加答兒	四十五分時
8 十八才	萎黃病	四十五分時
9 二十六才	肺結核	四十五分時

10	五十六才	肝臓硬變症	四十五分
11	四十才	神經性胃酸過多	一時間
12	二十二才	貧血	一時間
13	三十六才	輕度胃弛緩症	一時間
14	五十三才	胃弛緩症	一時十五分
15	四十八才	胃擴張	一時三十分
16	三十二才	腸弛緩症(三回)	一時三十分
17	五十二才	胃癌兼擴張	四時間

以上の試験は「ザロール」試験の成績と相一對すと即ち「ザロール」にも尿中反應の現出する三十分より一時間の差あり

R. Flaischer 氏の沃度仿謨試験及 G. M. 氏の膠囊試験にて更長時を要し甲は健体にて五十五分乃至百五分乙は四乃至六時間を要すと之れ甲にありては沃仿を食と共與へしにより乙にては膠囊自己の唾液にて溶解するに殆んど三時間を要する等の事情により然るあり

「フライセル」氏およるに此等の成績は實亦食后投薬の時間と其種類によつて異にして著者の如きは常に食后暫時を経て「ヨッシン」を與へたも然も尙一二の患者は異日お於て異ありたる結果を

得たりと但し尙健康人の區域内にあり「エワルト」「ポアス」兩氏の實驗による油類の最も速に胃内を去ると云へしも常より然らず著者の行へし「ヨッピン」にも亦遅速あり早きハ己ハ一二分にして去る亦攝取せられたる脂肪久しく胃内ハ停滯するときハ一部の沃度と胃粘膜より吸収せらるゝならん

終りに著者の患者に水治療法電氣療法或ハ種々の藥劑を用へたる後に於ける成績は後日と待ちて報告せん

●百日咳にオエヒニン (Euchinin)

Cassel, Centralblatt f. i. M., 1899 No 32

著者之十八名の患者に於て十二人と無熱に合併症なく経過し他の六人と多少持續せる熱を有せしと例へ本劑之最近十年間に百日咳の特効として稱用せられたる藥劑の如くなると雖も尙無熱血と合併病なき場合にハ確り良効ありと發作の數にも大ハ關係を及ぼす發作の強度は其持長より輕減せられ其経過を短縮すと然れども最も注意すべきハ不良なる衛生的狀況にあり

「オエヒニン」の用法を初め注意し四乃至七歳の小兒には一日〇二を與へ障害なき時と徐々増量〇、五乃至一、〇に至る此の用量により一週間及ふも一の副作用を呈せず「オエヒニン」は糖水

又は牛乳に混和するときは小兒と好んで服用すと

●掌 蹠 症 候 (?) Palmo-Plantare Symptom

幾多の熱性病(例へば腸窒扶斯急性關節痲質斯及び結核)に於て手掌足蹠に黃色を呈し其の回復期に臨むや自ら落屑して治と此の症狀を「くさんちゃん」Quencin 氏は掌蹠症狀 Palmo-plantare S. と名けたり本症狀を腸窒扶斯又は殊に著明な且は屢現はるゝ者にして特に重要ある症狀なりと即ち腸窒斯診斷の一助とし記載すべしと其の病理的研究に至りては尙不明なれども著者は皮膚より「トキミン」産物 Foxische Produkt の分泌による上皮組織營養障害の結果ならんと

Motta-Coco 氏は四十三名の腸窒扶斯患者に於て其三十九名は手掌足蹠に黃色を呈し恰も硝酸若しくは稀薄なる「びくりん」酸液を以て染色せられたる如し此掌蹠症狀の多くは第一週の終りに稀くは第二週に現はれ回復期の進むに従へ消失を而して本病の再發 *Reidiv* と共々再び現出す「もつたこーこ」氏によれば本症候は豫後上關係あしと雖も類症診斷上の價値に至りては充分なりと

Centralblatt für Inner. M. 1899 No36.

以上 三項 エ エ フ 生 譯

漫 錄

左の鈴木京都大學教授の第十二回十全會講話
會に於ける演説の大意なるが筆記者能に乏し
く十分教授の意を全たからしむる能はぞ加ふ
るふ匆々の際校正を乞ふの暇なく囁語、誤意
等あさを保せず責凡て編輯者あり讀者乞ふ
是と了せられんことを 編 輯 子
私も實と多少の野心を有し或る事に就て研究し
たることあるも折節茲に材料の持ち合せ無く從
て今日演臺お登りて別段これと曰ふ御話しは出
來ないが明治二十九年以來獨逸よりありて諸多の
見聞中學問の有様特に諸君は關係深き醫學の方
面に就て話さうと思ふ

獨逸に於ける醫學は如何にして教へられ如何に
して習ふかと曰ふお簡單お申せば醫學は皆大學
にて教授せられ我日本の如く大學あり高等學校
あり府縣立醫學校あり内務省の醫術開業試験あ
り種々智識教育の異なる様なことなく畢竟醫士
と呼ぶ者は皆大學卒業者である其分科大學は神
學法學醫學哲學とよりなり工科大學の設置なけ
れども別に高等なる工業學校あり近來工學派の
諸學者自己の地位並に工業の地位を高めんとし
て烈しく運動して居るが他の一方でと大學の學
者が之に反對すると曰ふ様な有様で随分八釜敷
やつて居る工科とて大學組織の内に置かぬと曰

ふい他の盛況を羨む次第で實は馬鹿げどた話だ
考へる

醫科大學教授其人の資格お關してご次の如き一
定の經歷を有する人おあらざれば大學教授とな
ることは出來ない

醫科大學を卒業せし人之所謂 *Praxischer Arzt*

であつて一論文を出して初めて *Doctor* としふ
學位を得る此「*ドクトル*」を醫者の業務を行ふよ

は何等の効もなく眞の位に止るのみおして乍去
眞に學者たらんに猶ほ大學の中よて數年自己
の説を磨き更に一つの論文を公よそこれを *Har-*
bilitation と曰ふ此時の論文ご前の論文よとも貴
要なるものであつて大よ自家の腦漿をしぼりて
出すのである此論文を大學よて演舌し諸學者の
稱賛よ得て初めて *Privatdozent* の位置を得る此

「*プリファードドチェント*」は大學に於て講義を
開く權利を許容され實は教授となるの基礎であ
つて多年此位置に研究を爲す既に此時よ於ては
自らの名と時間割に出し講義を初めることが出
來る其人の講義の良否に依り聽講者の多少を來
し且つ將來教授よならんとの心から碎心自己の
目的お勉強し又年も若く實よ此時代は面白き盛
美なる時代と曰はなければならぬ

「*プリファードドチェント*」の資格高まり段々大
きき學校よ招聘せられ其内先輩の欠員等よ依り
て助教授の位置に進む此際に既に政府より一
定の給料を受け其他聽講料は無論其人の囊中よ
落つ是れは日本と異なる點かと思はれる聽講料
のはいる代りよ給料は至りて僅かなものであつ
て既に教授とありても二千四百マルクより一万

二千マルクに過ぎませ助教授より段々進みて遂に
正教授となるなり

「プリファアドドチェント」の資格に關しての官吏

同様に見做すべしと曰ひ、いや、何時までも自由
を與へ置く方善しと曰ひ議論あるが現今大に官
吏臭くおつた様に思はれる茲に特に注目すべき
之此「プリファアドドチェント」なるものゝ存と
る爲よ何時にても教授の補欠をかし得る事であ
るこの點は英佛にまさり進歩せりと認めらる學
生の狀況に關しては先づ一般普通教育を受けて
中學お進み茲にて八年間羅甸語と希臘語と十分
に勉強す又小學の半ば頃より中學に入るとも出
來る、既に中學を卒業した曉には何處の大學へ
でも入學する資格を具ふるのである、大學生は

少趣きを異にし違警罪に觸れても大學標と巡查
に見せる時は姓名を記するに止り其學生は大學
一定の法律の下に處罰せらる、進級といふこと
もあるも學級に制限なく何年同級お止ると勝手
次第であつて一年半以上講義と聞たるものは其
科の試験を受くるの權利を有し第一期の理科試
門に於て或る科を及第するも或科を落第したと
せば次は其落第した科目を試驗を受けるのみに
止り及第した科目に於ては未だ自ら不充分と思
へは何年など講義と聽く事を得今日我國の如く
よ一學級に二年落第すれば放校に處罰するると曰
ふが如き人權と剝奪した様なことは少しもない
人の性質お依り或る科に不得意おれば何年でも
是でよいと曰ふ迄勉強するると曰ふのが學問の本
意であると思はれる、以上の如く獨逸にてと教

師は學問を賣り學生は是を買ふと曰ふ様な有様で頗る自由を與えて居るが師弟の關係其他學生保護の法は確然として立つて居る専門科と修むる生徒と對して徒と規則を以て束縛するは其當を得ざるものなりと曰はざるを得ず

獨逸よては諸多の學生會合あるが中よ勢力ある

會は Corps u. Panschenschaft どの大會合てあ

つて時々全國の學生代表者を出して會合する等

隨分盛するものである學生と皆自己の會合に一

定の「ファルベ」を帶び一見して之は何會に屬し

て居る者なるやを認むるを謂、制服は一定して

居らず、かゝる大會合の内に又小ある種々の小

組合あり且つ其他に音樂會學術會体操會等あり

獨乙學生の事に關して之嘗て十全會雜誌に投書

したこともありました

諸會合の規則の簡單あるもので而も意を盡して

居る今 Corps (學生組合の名稱) の規則を申せば

1 Wahre Freundschaft.

2 Unerschütterliche Ehrenhaftigkeit.

3 Das ritterliche Männesmt.

4 Korporative Gemeinsinn.

5 Unterordnung unter der Autorität.

6 Begeisterte Vaterlandsliebe.

7 Die Treue zum Kaiser.

兎も角各種の團體ありて交互の品位を保ち一方

に於ては暗々裡の制裁の下に嚴重なる規律を守

りて居る前申上げた通り學制上稱揚すべき點數

なから是を今日の日本に應用すれば利益莫大

なるものあらん元來自己の學問と自己の爲に學

ぶものである反之因襲の久しき日本人頭腦の中

に浸み亘れる諸多の弊害は自立心に乏しく例へば孔子の曰ふたことかゝ一々是を信ずると曰ふ様な工合で偶々進んでやつて見る人あるも猶先

輩の規準の外に脱ると能はずして生涯無爲にして嘗て自家特得の見識を顯はそなく終る實につまらぬ話しと曰とざるを得る西洋今日の學海の状態と眞理に眞理發明は發明浸々として止まる有様よて吾人も文明渦流中に足と容れたるならば益々自己の獨立心と養ひ不明の點は自ら之れ發明する様心懸るの實お必用あると考へらる諸君後來此心を以て専心勉強あらんとを

●新入學諸君を迎ふ

●卒業生諸君を送る

金風肅殺として梧桐秋聲を告ぐるの時百有余の俊英は憧々として東西笈を負ひ南北書と載せて

來り學と我宏堂の下お受けんとす明窓の裡更に此好健兒を加ふ吾人豈歡喜して迎へざると得んや、

諸士試に杖と郊外に曳け白岳は隨々として雲表お峙へ北水は茫茫として萬里に瀾る俯仰誰か壯雄の志なきを得ん若し夫れ六花片々として下り四望一色の銀界を呈するに當りては心之が爲お清く神之が爲お爽く浩然の氣座して求むへし而も上お良師あり以て研くべく以て練るべく以て究むべし來れ臂を振ふて俱に斯道の深淵に掉さむ、

俱に學を一堂の下に受け之が先となり之が後と呼び春は花と霞烟に尋ね夏は涼を綠陰お探し秋

深くして月と水邊に碎き冬來りて十里膽を北風

に練り苦樂を共にせし諸君、駒隙匆匆去年先友

を送れるの諸士將に今や其人たり

夫れ事業は成るの日に非らず遠く基するところ

ありて存す諸君今日の光榮一に多年錐股の勞に

因らずんとあらず錦衣歸故郷快事奚今此事お過

ぎんや然りと雖も學は渺々として限りなく茫々

として極りなし諸君以往社會生殺の活壇に起ち

普く救濟の實を擧ぐるに當りてや愈々勉み愈々

勵み豫て既往の學理を應用し特得の杖を揮ふて

以て自己の聲譽と發揚し延て我校名として白岳

の高きよ置かれんことを茲に諸君の光榮を祝と

ると共お切望して止まざるなり、

(四) 醫人之品格

マキヤヴェルリ曰く『爵位と品格として貴から

しむるに非ず、品格却て爵位と貴かうしむ』と宜

みる哉言や人の眞正の權勢と稱すべきものと品

格也

品格と人爵に伴はせして天爵お伴ふものどす故

よ世の爵位を假せして自らら爵位を具へ財貨と

擁せずして優に財貨を爲り、如何なる地位に立

つゝも其境遇として榮光あうしむ、蓋し品格と個

人品性の自然に發露したるものにして品性ハ

眞、善、美、の人間化したるものなり而して品

性の美容觀的よりすれば則ち品格と知るべし

品格を以て貴族社會の專有のものど誤認する勿

れ、鴉は金籠に盛るも其惡鳥たるを改めせ、鸞

●醫 窓 餘 錄

ハ破籠に啼くも尙ほ好音を失はざるなり、眞珠の沙礫に混する其光彩赫奕必らず人目を眩射せよんばあつて品格ある士の社會に於ける亦此の如し、彼の坐する所馨香あり彼の立つ所光輝あり、求めずして崇敬自ら到り、期せずして愛慕自ら來る

更に一步を進むで觀察すれば、品格と自重を意味す、自重と自家の世界に於ける位地を信し自家の個人としての眞價を信し自ら立脚點を畫し猛進勇前し敢て自ら愛惜して自家と墮落せしむるを欲せざる也、それ唯自から重んぜ故に彼が一舉一動一指一毛も敢て自から毀損せざるに非ざるや若し自家の品格を重んずるは自から重んぜる所以なりと知らば總ての克己、總ての習練皆悉く此中に鍾り來ると固より多言を俟たざるべ

し、故○曰○く○品○格○は○爵○位○貨○財○を○作○り○自○重○の○精○神○は○品○格○を○作○る○と○正○二○位○何○々○爵○若○し○く○は○學○士○博○士○の○英○名○は○小○學○兒○童○を○し○て○羨○慕○せ○し○む○、○然○れ○ど○も○人○は○爵○位○を○得○、○黃○金○を○得○れ○ば○(○眞○傑○に○非○ざる○よ○り○)○何○人○も○實○お○臆○病○と○なる○なり○、○彼○の○『○爲○子○孫○不○買○美○田○』○者○見○來○れ○ば○當○今○碁○布○に○似○た○る○英○雄○の○中○それ○幾○人○か○あ○る○。○金○色○の○光○一○た○び○袖○下○に○落○る○の○時○と○志○士○先○生○默○然○と○し○て○廢○寺○の○地○藏○の○如○し○醫○界○と○云○と○老○政○界○と○云○と○ぞ○、○實○業○社○會○も○學○者○社○會○も○科○金○の○濁○流○漫○々○と○し○て○銅○臭○人○を○し○て○腐○乱○せ○し○む○、○嗚○呼○上○の○好○む○所○、○下○之○お○做○ふ○、○所○謂○名○士○が○私○利○を○姿○よ○し○て○貨○殖○に○急○なる○もの○安○ん○ず○後○輩○俗○吏○等○苞○苴○の○爲○め○に○醜○風○を○傳○ふる○を○怪○し○ま○む○や○、○滔○々○たる○天○下○、○美○德○を○具○ふる○の○佳○人○才○士○、○名○は○仮○令○堂○々○た○り○と○雖○ど○も○其○實○と○又○何○ぞ○醜○巷○屋○裡○の○賣○女

と異なるあらむ

吾人の絶對又拜金と咎むるものに非せ、富之人

して地と拂ひ去らんとす

の性情學ばずして俱に欲する所、世は富者の福

夫れ文明人士には文明人士としての資質あり偉
大國民よと偉大國民としての品格あるなり吾人

言ほと貴く大なるものあらざれば也

司馬遷が所謂貨殖の道に三あり、本富と云ひ、末

は此の如くにして文明人士たるの資質あるやを

富と云ひ、姦富と云ふ、此三者の中本富、末富

知らせと雖ども苟も世界の日本と云ひ戰勝國民

に至つては即可なり而も名譽を棄て正義を棄つ

と云ふもの必ずや偉大の品格なかる可からざる

るも猶ほ姦富の人たらざる可からざるか、語に

を信ぜ吾人が而かく信するが如く今の日本人よ

謂ふ廉士も財を愛せざるに非せ之を取るは道あり

は果して文明人士としての資質あるか偉大國民

りと吾人豈に好んで貨殖を排せむや唯だ茲も慨

としての品格あるか、已に國民一般が自然の美

せるものゝ我國民が擧げて姦富に沈倫せるを爲

理想の念に淡くして而して勢利色慾の奴隸とな

め也。

り一點人間の品格と没して日よ俗化しつゝある

殊に維新以後歐米の文運一度び我邦を浸潤し我

の實又疑ふ可からざるに非すや古人云ふ品性あり

が國民を感化するや人皆皮想の文明に感溺し深

さの國家は歴史と無みずと國に國性多く人に人

く其真相實體を究めず徒らに歐糟を嘗め米粕を

格なくむば何を以てか世に處するを得ん。

ア、偉大なる國民と大なる理想と有し又大なる精力を有す世の所謂文明人士を見よ彼等と皆我が人衆の間ふ立つて温乎たる風藻自づかふ神韻在り自ら威嚴存す。

借問す、日本人に大理想あり、大精力あるや、抑も亦小なる日本人と到底大國民たる能はさるか、想ふ希臘は小ありと雖ども歐洲文明の淵源とあり、葡萄牙は小ありと雖ども猶大陸の一大國民たるを失はさる也

由來日本人は大國民としての素と有せるもの大理想大精力は養ふて之を得べし、今あてて大國民たるを得ざるも一旦國民の品性を高むる至らば大偉人出で大事業起る尙掌を翻へすが如けんのみ。

就中我醫學が僅々たる歲月間あて長足的進歩

をみし彼等歐人の未だ容易に發見し得ざるものと雖ども尙ほ能く人を知解するものあるに至りしは係はらば我邦醫人が社會に於ける地位勢力の寧ろ他學者よりも低くして尙ほ一種の意味を以て比較的冷遇せらるゝ所以のもの果して如何是れ我國民が先天的に有する猥りに一方のみ偏するの氣風と眼孔の小なるとに外ならずと雖ども抑も亦醫家自身か招く所大ならずんばわらず豈に痛憤恨惜の至りならずや。

蹴て世界幾多の事物を見よ、一として醫學なるものゝ力をからすして立つものありや、否、百萬の虎狼と屠る千軍萬馬の原動力も、海と縮め百陸一瞬の蒸氣器も、學校も、生活も、擧げて數ふるものは悉く是れ醫なる一字の常お離るべからざる大雄勢あるに非ざや、而も社會の進歩は

益々醫學との關係を親密重要ならしむるものあるに非そや。

蓋し政治軍事の如き、其名譽榮へ即榮なり、其功業大は即大なり、然れども其名譽や僅よに一世よ止まり其功業や僅に一國を益するに過ぎず、ナポレオンの軍功の偉大なりと雖ども渠れが歐洲半數の民を殺したるの文明史上果して何等の効を與へしそ、ヒスマルクの政略は獨逸帝國を九鼎よども重からしめたりと雖ども益するどころ僅よ獨逸一國よ止まりて世界は何等の利益も受けざりしに非ずや、唯り醫學の功名よ至りては是れと異あり其功益の全世界よ及し其名譽は千歳の後に傳はる、ゼンナーが兼て種痘術を發明して其利益を享けしは皆お英國人のみに止まらば、世界等しく其恩澤を蒙り以て今日の幸福

を得るに至れり、これをナポレオンの軍功に比して如何。ペーリング、北里氏が血清療法を發明し、毎年幾百萬の生靈を天死の禍より救ひしや測り知るべからず、これをヒスマルクの政略の僅よ獨逸一國を益せしよ過ぎるに比して果して如何。嗚呼醫學の功名も亦偉大なる哉。思ふに政治家となり、軍人どふる、これ皆雲の如き虚榮よ迷ふ輩のみ、第二流の人の成すべき業のみ、第一流の人物の必ずや此榮光ある醫學の功名を期望せさらんや。

且や醫學の社會お關係せるところ更に甚だ大なるものあり、古への醫學を以て、單に治療の學問となし、醫家之則ち病者と治療せらるよ止まるものとせしも、國運の開發の益々其圈堵を擴張し、司法、行政、立法にも直接關係を有するお

至り、社會の事物皆悉く斯學に關係を有せざるものなきに至れり、此お至つて斯學を研究するもの、責任漸く重大どまり、昔日此醫家と其思想の變遷あらざるへからざるは自然の數なりとす。

曾て聞く、歐米の代議士醫士お多しと、是所謂良醫にして良相たらんと欲するもの素より、大丈夫の希望して止まざる所なり、吾人の則良醫たらんと欲する者、又良相たるを欲せさふんや。若し夫れ俊才の士、己に其志を遂げて良醫となり益々奮つて代議士となり、或い其養ふ所の辨と以て天下の得失利害と辨論し、其學ぶ所の術を以て萬民の憂患疾病と救濟せば則操觚の士良宰相も亦之よ如かさるなり。

恨むらくは、古來我國の醫家なる者皆社會と特

別なる關係を有し、全く別天地の下み生存するものと思推し、甚しきは醫家が名人間に往來するの職業たるを利用して適ま社會上の媒介物とし、遂に其弊や彼等を幫間者流と同一視するに至れり當時理想の極めて淺薄なる彼等は敢へて

自から刷新を思はず、自ら一階級を作て恬然これお満足するの觀ありたりき。此厭ふべき悲むべき慣習は、長く今日お存し、今や長足的學術の進歩したるおも關こらず社會より眞價を以て遇せられざるもの、必竟彼等自己の責任を解せず幼稚ある國民の思想と開發せしむることあく又自己の地位と高むるの道を講せずして以て社會も完全なる裨益と與へと、拱手陋習お甘じ以て自ら地位と卑墮して、省みさりしに由らすん

ばあらず、豊浩嘆よ堪ゆべけんや。

要是醫學者たるもの、先づ其學術を探究すると、同時お又これを實際に應用するの智能を有せさべからず、換言すれば社會の事情も亦最も精細にお知了せると要す、此二者相待ちて醫學完全の任務と盡し得るものあり、即ち自己の學問と社會の關係とを研究し、社會の出來事立法にまれ、司法にまれ、行政にまれ、自己の學問に直接間接關係ある事おして苟も不完全の事あらんか自ら論難辨解し以て之か革新を期せざるべからず又一方おと自家學問の進歩と妨くる如き事あるか、或と自家特有の權利即醫權の擴張を謀り、己の地位を高むる事よ務めざるべからず、之れ社會よ對する家の任務おして又世よ生存せざるもの、公義とと。

夫れ然り而して現時我邦幾千の醫家中能く此責

任を知解するもの果して幾人かある彼等の多く之前に述べたる古來の習慣と腦底に有するものにして人の病を癒するを以て最終の目的とせるものに非すんば書庫粘着する學者の人士のみ其國家的觀念を有せるもの又醫權の擴張を企圖せるもの、如き寥々として曉天の星も嘗みらざる也。

噫呼頽廢せる哉。今の醫界人士の風や、彼等は今や皆高尚なる日新醫學を修得し、社會の一紳士として、立つべき品位を有せるよ拘はらず、其心敢て士人の心を修めず、依然として古の幫間的醫風を傳へ、徒らに其車を美おし、其服を麗にし、功言令色、僅かに病家の鼻息を窺ふよ務めて又堂々男兒の見識の何物たるを解せず營む所唯私利、行ふ所唯私慾、敢て國家の爲めに

之を盡さず、敢て斯道の爲め、之を究めず、惰弱の氣、輕薄の心、滔々として是れ風となす、如斯くもして我醫界の人士猶警醒するどころなく、んば深遠高尚ある醫學も遂に活動することを得ず、一の死學として終らんのみ。此時此際起つて雄勃咆哮とるは豈又吾人の大快事に非すやア、吾人青年は未來の活火なり主力なり司命なり社會をして生氣あらしめ、靈動あらしめ、明光あらしむるもの、一ふ青年の力よる、青年の實に社會の一勢力なり、社會は時ありて、腐敗し、惑亂し、墮落し、迷信す、社會の暗黒なる時代にありては、幾多の罪惡と、迷執と、偏見とあり、其間に伏在せり、而して此間獨り天真爛熳として高潔純美のあるあり、社會の腐敗墮落を匡救刷新して、惑亂迷信を啓發指導し、以て社

會の罪惡と糾弾し、正義公道の扶植擁護を任す、今日の青年の實に社會の救濟者あり、活火あり、司命なり、主力あり、豈に其責任重且大ならずとせんや。

靈臺一片の天火熾て禁する能はざるものあり、社會の事々物々觸るゝ所として焚燬せざるはなし、青年が社會の一勢力として重きと置かるゝ所以は即ち此にあり、諸氏、何ぞ其天真を發揮して、而して其本分と盡さざる、予今日此言となす、豈敢へて徒らふ辨と好むものならんや、要は斯學界諸士の一顧を煩はすに外ならざるあり。

(完)

遊立山記

香屋居士

香屋居士

人生雖多樂莫及一笠瓢然或攀峨々高山或渡滔々大河探千古遺蹟窮天下名勝之樂者

不能登山於是截竹爲杖焉自是或登或降沿溪而行水涓々如奏音樂又有一飛泉水勢激巖石一激而爲

去年七月余與友人某約遊立山二十八日拂曉某來叩門呼曰時已遲矣余蹶起整裝出時旭日將三竿渡

細霧再激而劇雨三激而爲密雪爲飛霰石皆奇狀如虎如豹如馬之奔牛之臥使人肝膽寒遙望左方之諸

射水川至堀岡一帶青松鬱然橫于海濱與白砂相映其高者如蛟龍升天低者如綠雲擾々至七軒村有一

山巍々突天煙雲濛々繞之變幻出沒爲一奇觀又處處有水簾綏々灑々溶於潭石上皆具圖畫之趣山逕

茶店乃憇焉復行數里至富山憇某家喫飲午后一時發經善名荒谷等至上瀧時午后五時乃投于民屋此

也時既午后一時乃喫飯而去一山坡當前曰九十九折西亦向東遂至于籠渡籠渡水漲則乘籠而渡之處

間道路甚惡蓋洪水害之也此日行程凡九里二十九日午前五時發程此日天氣如昨行數町水勢洶々如

視某殆無人色既而有數屋在谷底蓋多枝原溫泉館也衆心始降至溫泉夕陽將昏乃投宿脫衣浴溫泉疲

奔馬是爲常願寺川常願寺川北陸四大川之一其大可知也渡橋行數町至岩倉自是經中野橫井和田小

勞頗瘵午后十時擁衾而睡三十日拂曉喫飯發此日雨降煙雲濛々而山峯當路

見等左右皆峻山高嶺昨日所望之嶺或伸手撫其頂是則近山去遠山來之謂乎行十數町抵本鄉村自上

或捫石而進或板藤而登達一山頂時渴甚陰崖有水瀧至此凡三里就一寺而憇寺僧善遇余輩曰無竹杖

瀧至此凡三里就一寺而憇寺僧善遇余輩曰無竹杖

掬飲之氣始蘇乃歟自是小徑螺旋十數町出一太原

日彌陀原廣可四里行里餘有一大奇巖形似鏡故名
鏡石時雨霽日出諸山翠色如滴皆欣然不知手之舞
足之蹈至室堂已午前十時憩少時復行殘雪當路皎

三里餘至上瀧午后二時達富山乃乘車過小杉高岡
等而歸家古人云天下之至奇至勝者每在於至險之
地余於是乎知其言之不虛妄乃記之以示未遊者

々然忽至一山麓望之巍然聳于雲表即是立山也或

攀巖角而進或穿石間登頂上在一神祠堂宇雖不宏

雜詠

壯結搆古雅可觀一拜而退顧望當西戴雪皚然立于

笹岡芳名

郡山之表者白山也東方稍近巍々乎者大蓮峯也其

○秋の野の千草にすだく虫の音と

他富士淺間等出沒隱見於烟雲杳靄之間至是壯觀

ひとりさく夜はねられざり鳥

極矣歸室堂喫飯取路池嶽谷處吐火煙大者六處小

○山を開いて三反はかりろば白し

者數十處如波濤臭氣穿鼻至彌陀原天色溟々細雨

○寒村十戸月白き夜を礎うつ

雨急降左折則來路右折而進崎嶇三里餘遙聞水聲

○南園に大輪の菊盛りあり

響々稱名瀑是也晴日隔溪而望瀑是日雲霧四塞不

○永き夜や栗を山家の馳走ぶり

能望行里餘至材木坂降坂渡藤橋時夕陽已昏又攀

○さらくと石壇のそみに落葉哉

崎嶇山腹行二里達足倉投宿于佐伯某

鵜澤の君は死後悔み侍りて

三十一日午前八時發程此日天氣晴朗道路平坦行

輕部修一

○聞せばや常世離れし君が旅

涙に暮るゝ我が同胞に

●秋季陸上運動會記事

○秋曉早發

田 秋海 初稿

秋高く馬肥ゆ、方ふ是れ武を用ゆ可きの好時節、

茅舍雞聲落月中歸郷心切思無窮侵晨行色秋山驛

況んや積日泰平の長眠に倦みし幾多の健兒が、

一路冥迷宿霧濛

鐵腕夜々に鳴り虎脚夢裡に躍りて、稜々たる霸

○秋日解剖室即事

全

氣正に斗牛を衝くの概あるに於てとや、

人屍満室輿偏幽木葉紛々搖落秋數輩操刀衣皓々

號砲二發、爆然として霹靂ふ轟くや、昨來の恨

披肝枯骨使人愁

夢全く打破せられ、蹶起袞を躁て起てば、夜來

○冬日田家

全

の陰雨漸く収まり朝暉閃々草露を射る、七百の

雲凍風寒欲夕陰農家禾斂正蕭森何人遊獵射棲鳥

健兒嬉々として場内々簇かり來りて今や將に龍

一發銃聲響後林

鬪虎攘の壯觀と演せんどす、

○雪夜訪友人某君

全

校門を入りて左に小綠門と出れば、滿場の光景

風雪何妨撲而飛相思一夜訪柴扉閑談到曉興難盡

双眸の中に落つ、大旒小旗幾百流翻翻朝風に靡

不信扁舟門外歸

く更に右折して改札口と抜け、一段高き賞品

授與所にと會長嚴然北面して其坐を占め、副會

長賞品係員及び音楽隊従へり、左に隣して職員
家族席、衛生部競技者準備席等劃せられ、右は
來賓婦人席來賓席(特別招待)來賓席保証人席各
學校生徒席等相比隣す、更な場の左に偏して醫
學部醫科一年の催しお係る清杏亭あり茶菓を備
へて客を待ち、靜勝館内に於て時習寮生の餘興と
して古物展覽會を設け破靴弊履等を輯めて比譬
百出巧みに人の願を解かしむ、

時辰は八點を報して係員は各其要所に就く、競
技者の姓名は點呼せられ、鈴鐘は鏘然として鳴
る、抽籤席已に定まり、扮裝百態の勇士壯漢、均
しく「スタート」お足尖を聯ねて腕を按じて竣つ
正よ是れ溝引の強弩、

危機一髮號砲耳を劈くや、百弩一時に弦を放れ
て飛ぶ事矢の如く迅なり、二丁、四丁、六丁、二人

三脚、一人一脚片足武裝、戴囊「スプーン」擔荷、
竹馬、提灯、學術、衛生擔荷、障害物、部隊「サツ
ク」巾飛高飛、一分間、一哩競争等回を算する事
六十有七、孰れも萬身の勇を鼓し天晴れ中原逐
鹿の活劇を演じて燦爛たる「メダル」の光輝も胸
邊を飾らんと欲するの壯漢、赤飛び白驅け黃跳
り青駛る或は大潮の洶湧するが如く奔馬の狂奔
するに似たり、或は兩々相抱擁して步調整然動

作一致疾風落葉を捲くが如く、或は戴囊にのみ
心を奪これつゝ、躓倒して臍を噛み、凹少き「プー
シ」に輕球を護して走るの難きを嘆じ、蠟燭に
火を点するに困しみては坐ろに秋風の無情を怨
み、蹣跚踰跟進まんと欲して能はず偏へに重荷

の搖動するに問は或は脱兎の如く横梯を躍り超
へ網目と潜り抜け高柵濛濛、細棚、樽胴、圓環

低柵等の難を冒して神出鬼没の壯觀を演じ或は
郎の諸氏なりとす願くくと諸氏益々自愛して長
着服草鞋を穿ち背囊と負ひ劔と帯び銃を提げて
く遏雲吐霓の霸氣を失ふ勿れ。

走る事勇士の難は向ふが如し、一去一來愈出て
愈奇、數万觀衆が賞賛拍手の聲と尾城岨下を
震撼し名譽ある健兒が双頬には徐ろに微笑を漾
へて枝は全く終りを告げぬ、

會長は即ち委員を壇下に集て怡々として幹旋の
功を勞らひ次て勵聲一番 天皇陛下の萬歳を呼
ばれ衆相和して唱ふるもの三、時晡に近くして
茲に我陸上大運動會は畢れり、

吾曹は特に本日の運動會は於て我醫學部は在り
て永く名譽と表彰すべきと、駒井定哉、米澤恭
次井上隼雄の三傑及び兒嶋亮吉、吉江衆太郎戸
田伊代治、齋藤義雄、山崎彦太郎、藤原敏夫、
松田研吉、島誠郁、増田貞吉、尾倉一英、新次

雜 錄

● 本校規定改正 從來の規程中左の通改正本年

九月より實施せらる

第一章 通 則

第六節 授業料

第三十條 (分納期ヲ左ノ如ク定ム)

第一學期

醫學科金九圓
藥學科金七圓
大學豫科金七圓

第二學期

醫學科金八圓
藥學科金六圓
大學豫科金六圓

第三學期

醫學科金八圓
藥學科金七圓
大學豫科金七圓

條ニヨリ處分ス

第七節 休學

第三十一條 (納付定日ヲ左ノ如ク改ム)

第一學期

自九月二十四日
至全月三十日

第三十九條 休學ノ許可ヲ得タル者ハ次學期以

後其學年間ノ授業料ヲ免除ス

第二學期

自一月二十四日
至全月三十一日

第四十條 第一學期ヲ終リタル後一年志願兵ニ

服役スル者ハ其服役中休學シ次學年ノ第二學

第三學期

自四月二十四日
至全月三十日

期ヨリ其原級ニ復スルコトヲ得

第三十二條 各學期ノ授業料納付定日以後ニ於

第八節 退學及除名

テ入學シタル者ハ入學許可ノ日ヨリ十日以内

元第四十條ヲ第四十一條トシ以下順次繰下グ

ニ其學期ノ授業料ヲ納付スベシ

第四十二條 (第四項ヲ左ノ如ク改ム)

休學退學等各學期ノ授業料納付定日以前ニ係

四 寮費ノ怠納三十日以上ニ及ブ者

ルトキハ直ニ其學期ノ授業料ヲ納付スベシ

第九節 時習寮 (寄宿舎)

第三十五條

授業料ノ怠納三十日以上ニ及ブ者ハ
第四十七條 寮費ノ怠納十人以上ニ及ブ者ハ登

登校ヲ差止ム

校ヲ差止ム

其怠納三十日以上ニ及ブ者ハ第八節第四十二

其怠納三十日以上ニ及ブ者ハ第八節第四十二

條ニ依リ處分ス

右ノ外本校諸規程中學生トアルヲ生徒ト改ム

毀損シタルトキハ其趣圖書掛へ申出テ相當ノ
代價ヲ辨償スベシ

● 圖書閣覽室ノ設置 從來常臨床講義場内ニハ
● 公認下宿 本校には是迄公認下宿所あるもの
特別ニ圖書閣覽室ノ設ケナク吾人ノ大ニ遺憾ト
なかりしが今回公認下宿所を設け生徒の寄宿を

スル所ナリシガ今回之ヲ新設シ可及的生徒ノ便
許可せり

宜テ計ラル、由ニテ松田教務主任圖書掛タリ其
● 解剖遺體法會 十月十四日午後一時より本市

規定ヲ舉グレバ次ノ如シ
小立野如來寺ふ於て解剖遺體の法會と執行せら

一 當分ノ間毎週火金ノ兩曜日正午ヨリ開室午
る同寺方丈の正面ふは各遺體糖靈の牌と安置し

後五時閉室ノ事
萬般の裝飾周到なりし定刻に至り十數名の僧侶

一 圖書ハ當分各教官ヨリ新聞雜誌ハ圖書掛ヨ
鄭寧に讀經し北條校長金子教授受驗生總代河内

リ各自借受ケ閉室ノ際圖書掛へ返納スベシ
監次生徒總代中島擴三の諸氏各々祭詞と朗讀せ

一 圖書并ニ新聞雜誌類ハ一切携帶歸宿スルヲ
られ次で職員學生及遺族の焼香等いと鄭寧お行

許サズ
はれ四時頃全く式を終へたり猶當日の參詣者ハ

一 圖書閣覽室ニ於テ喫煙ヲ禁ズ
北條校長山碕醫學部主事を初とし醫學部に關係

一 圖書類ハ大切ニ取扱ヒ毀損スベカラズ但シ
を有する職員學生及び遺族等無慮百數十名なり

さ又教授今井理學士入江法學士等とも見受たり

次郎氏へ宛てたる書翰と得たれば左に掲げぬ

●鈴木文太郎氏 元本校醫學部教授たごし鈴木醫學士は兼て獨逸國に留學中の處七月十四日歸省今回京都醫科大學教授に任せられ解剖學第一講座擔任と命せらる

前略 此度の序お東京部の雜報消息おと報道可仕候第一には東京に於ける第四高等醫學部同窓會に御座候由來我校より卒業生少なく就中東都お學ぶ者少なく偶々上京する者あるも互お面識なき者は常に四分五裂して不面識の裡に終り先輩と後輩との連絡なく相互の不便利此上もなく御座候により今度該會を發起組織仕候恰か

●鈴木少軍醫 賛成會員鈴木寛之助氏は今回海軍中軍醫お任せられたり

も十全會東京支部のごとき性質のものお御座候隔月一回開會し會員の親睦と厚ふせんが爲お御座候且つ東京にては田舎とい異なり時間の經濟甚だ必要あるのみならず同市中と雖も互に遠隔して一々訪問談話すること實際に相叶不申候に

●久保得業士 金澤病院婦人科醫員久保武氏は今般其職を辭し東京帝國大學解剖學助手として十月十九日當地出發上京赴任せらる

より一會合の上お數多の知己と會合するを得べき便利も有之候第一回へ去る四月高安主事の上

●石森得業士 醫學部病理學助手たりし石森國臣氏は辭職の上福井縣檢疫官に轉任せり

して一々訪問談話すること實際に相叶不申候に

●鍊腸居士の書翰 嘗て在校の時と校を去りたる後とを問はる本會お對して尤も熱心篤實者の一人たる鍊腸松原賛成會員より去九月中河内監

より一會合の上お數多の知己と會合するを得べき便利も有之候第一回へ去る四月高安主事の上

京と機として開き第二回は六月に開きて富澤君の方と御座候

の送別を兼申候第三回と八月高安主事留學送生沼君今度東京痘苗所技手を辭して大學生理學

別を兼申候第三回は八月高安主事留學送別を兼教室助手(大澤謙二博士)と相成申候同君は終生

て開き度考と御座候中々先輩の人も案外も多く此學を専門科として研究せらるゝこのことと御

甚だ愉快有益に御座候小生は今度八月限りにて座候甚だ健氣のいたりに御座候基礎學科研究の

病理學撰科を退學致し今九月より愈々終生の專必要あることは勿論に御座候酒井君と今度法醫

問科たる精神病學撰科に入學仕候蓋し小生は廣學撰科に入學仕候駿河君は此度好生堂病院を辭

き意味に於ける神經病(精神病及神經病)を專攻して生沼君お代り東京痘苗製造所技手お命ぜら

したき考と有之候故昨年及今春は病理學撰科おるゝことに内定仕候併し勿論確定の上に無之候

入りて神經組織研究の基礎を修めたる次第に御關屋林之助君は今般上京國家醫學講習科入學本

座候併し何分病氣のため不幸として充分其意を多三郎君と大坂痘苗製造所技手を辭し目下金城

達するを得ざりし爲め本年の精神病撰科入り診療院に在るも今月下旬上京して皮膚梅毒科撰

たるも其餘暇くはは神經病理組織學と専門科入學富澤君と永樂病院を辭して山代に開業鹽

研究いたし度と積み御座候又都合に由れば神經谷君の少軍醫候補生と合格鈴木君比叡乘込遠洋

生理學と聽講するやも計られず候先づ益々繁忙航海の處先達歸朝石森君十一月下旬頃上京精神

病學科撰科入學の筈北君今夏近衛歩兵第一聯隊
 よて召集に應じ(六月より八月まで)出隊後衛生
 黴菌學撰科にて續學、大澤五月山崎秋津磨兩君
 (舊卒業生)目下何れも大學眼科介補勤務の筈
 や切あり

●級長及び幹生 本學期間の級長及び幹生と今
 (山崎君は介補あるや一寸小生確知不申)五堂加
 一郎君(小倉加一郎と改姓)は目下日本生命保險
 度左の如く任命ありたり

●野田醫學士 本會賛成會員たる内務技師防疫
 課長野田忠廣氏と清國牛莊地方「ペスト」視察の
 爲出張を命ぜらる

●高安醫學士 獨逸留學を命ぜられたる高安右
 人氏は去九月十二日新橋出發十三日横濱解纜の
 佛船にて赴かる出帆前同氏が送別の宴を會せる
 各生徒に眞影一葉つゝと送られたり

●木村教授 豫て獨國留學中の木村教授は十月
 二十六日倫敦を發し十二月下旬歸國の由鈴木大
 學教授の許へ通信ありたり予人鶴首先生を待つ
 ●級長及び幹生 本學期間の級長及び幹生と今
 度左の如く任命ありたり

- 教授 下平 用彩氏 (醫學部第四年級々長)
- 教授 小川 勝陳氏 (同 第三年級々長)
- 教授 上田 計二氏 (同 第二年級々長)
- 教授 金子 治郎氏 (同 第一年級々長)
- 教授 櫻井小平太氏 (藥學科第三年級々長)
- 教授 高山 基重氏 (同 第二年級々長)
- 助教授 堤 從清氏 (同 第一年級々長)

●兒島亮吉 醫學部第四年級幹生 中島擴三、中西政太郎、

醫科第三年級幹生 湯本四郎右衛門、神坂勇

教授 下平 用彩

治、山崎芳太郎、米澤啓、

外科總論

講師 小林 文泰

全 第二年級幹生 丸山六郎、土田久三郎、

婦人科學產科學獨逸語學

教授 小川 勝陳

清水秀夫、都築熊藏、辻村耕夫、

細菌學

講師 森島 彦夫

全 第一年級幹生 未定、

醫用化學製藥化學衛生化學調劑實習

教授 高山 基重

藥學科第三年級幹生 駒屋禮三、

裁判化學藥局方藥品鑑定衛生化學實習定量

教授 櫻井小平太

全 第二年級幹生 柏木敬介、

分拆實習獨逸語學

教授 末近 義介

全 第一年級幹生 棚田佐吉、

物理學獨逸語學

助教授 從清

●醫學部本學年第一學期及び受持教師次の如し

醫藥用動、植物定性分拆學礦物學生藥學

助教授 村田金太郎

解剖學組織學

教授 金子 治郎

獨逸語學

助教授 飯森益太郎

生理學

教授 上田 計二

解剖學

教授 磯田 正謙

法醫學病理學

教授 村上 莊太

獨逸語學

助教授 磯田 正謙

內科學藥物學

教授 山碕 幹

解剖學

講師 飯森益太郎

眼科學內科學

教授 佐々木 達

兵式体操

助教授 福見常太郎

外科各論皮膚病學徽毒病學獨逸語學

全

助教授 福見常太郎

全

助教 日下庄太郎

●辻村喜信君 目下山田病院薬局を奉職中

全

助教 宮川 爲三

●金澤病院の這般非常心得なるものを設け非急

全

囑托 茂木佐二郎

の災お備へんとす條中吾人お關係せること寡な

●山岸理一郎君 昨年十二月一年志願兵として

からざるを以て茲お掲ぐ

入營せられ本年七月藥劑官候補生を命せられ目

金澤病院非常心得左の如し

下金澤衛戍病院にあり

第一條 本院近火等非常の節職員は勿論看護婦

●八十島庄五郎君 一年志願兵として入營中な

使丁に至るまで一同速に出院し此規例に據り

りしが満期後直に福井病院の招聘に應じ赴任せ

各患者及諸器具等總ての保護を爲すべし

みれ目下同病院薬局にあり

第二條 本院入院患者の内重症若くば病症に依

●鷺田發治郎君 金澤病院薬局を奉職せられし

り自身おて進退を爲し難きものあるを依り非

が本年十月上旬富山縣出町病院の招聘を應じ同

常救濟の爲め入院患者を甲乙の二種に分ち甲

院に赴かる

を進退爲し難きものとし赤札乙を自身にて歩

●佐藤捨三郎君 本校大學豫科化學副手たりし

行し得るものとし白札を各病室の入口を掲げ

が本年七月大坂衛生試験所技手に任せられ爾來

置き尙看護婦使丁に於て甲患者の室へ擔荷器

同所お勤務せらる

を配付するものとす

擔荷器と各看護婦室に備へ置くべし

第三條 宿直の醫員は非常の節第一各部の甲患

者と速に立退處へ護送すべし

立退所と第四高等學校醫學部内とす若し同所

に至ること能はざる場合は臨時其場處と定む

るものとす

第四條 宿直の調劑員第一藥籠に注意し若くば

之を携帶し患者立退所に至り先づ調劑の準備

を爲すべし

第五條 宿直の事務員は第一院内諸取締非常門

の開閉及び駈付人の氏名を記帳し若し豫定の

立退所に至ること能はざる場合は仮りに其場

處を定むる等諸事不都合なき様取計ふべし

第六條 駈付たる醫員は各其部に屬する乙患者

を取纏め立退所へ護送し又た各部諸器械の取

仕末に注意し諸事不取締なき様取計らひ尙院

長部長の指揮に従ふべし

第七條 駈付たる調劑員は藥品及び諸器械取仕

末に注意し就中藥瓶の如きは精々注意取仕抹

を爲すべし

第八條 駈付たる事務員は第一諸帳簿器械等縣

有物品取抹お注意し金庫並よ本院倉庫の戸締

總て臨機の取扱と爲すべし

第九條 駈付たる受付掛員は一名と駈付人氏名

と記帳し及び本院立關内外の取締と爲し一名

と各病室器具の取仕抹を爲すべし

第十條 總て職員ハ各科部所内各其分擔する處

の諸器械等紛失せざる様注意し使丁其他駈付

人に指揮し速に本院倉庫に運送する様臨機の

處置と爲すべし

第十一條 近火等非常の際醫學部生徒と出院の
全事務員一名 生徒三十名 看護婦八名 使

箒お就き本院職員並に看護婦使丁とも非常分
丁二名

擔左の通り相定むと雖も現場の模様依り互
二入院乙患者掛 内科醫員一名 外科醫員一名

に助力し各患者を初め渾て異狀なからしむべ
眼科醫員一名 婦人科醫員一名 調劑員一名

し
生徒二十名 看護婦九名 使丁一名

第十二條 院長並み各部所長出院の上臨機指揮
三内科諸器械掛 内科醫員三名 生徒廿名 使

するものとす
丁一名

第十三條 本校職員醫學部生徒及び看護婦使丁
四外科全上 外科醫員三名 技術員一名 生徒

とも非常警戒の場處通行の爲め左記雛形の印
十五名使丁一名

鑑を附與す必き常ニ携帯すべし
五眼科全上 眼科醫員二名 生徒十名 使丁一

第 號

表 石川縣金澤病院

二 裏

三寸

石川縣金澤病院何々
氏 名
又ハ第四高等學校
醫學部生徒

非常分擔左の如し

一入院甲患者掛 宿直醫員二名 全調劑員一名

二名

七調劑所全上 調劑員三名 生徒十五名 使丁

六婦人科全上 婦者科醫員二名 生徒十名 使

丁一名

名

八事務所全上 事務員五名 使丁三名 駈付人
夫未定

以 上

● 体格檢査 十月二十五日より本校生徒二十歳
未滿者の体格檢査を施行せり

● 海軍少軍醫候補生募集 海軍省告示を以て少
軍醫候補生三十三名の募集あり出願期日は十一
月二十日迄にして採用試験は十二月一日より行
はらゝ由

● 第十二回の講話會 十月二十八日午後二時三
十分より本校生徒扣所あて開かる職員學生等
無慮二百名講話部委員長佐々木醫學士起て今よ
り開會すべき旨を述べ次で左の演説ありたり
第一席北條校友會長登壇沈着莊重に希望と述べ
らる其要に曰く

諸君は凡て職員たり生徒たるの上にて於て尙餘
分の業務を爲さんとすると中々困難の事なり
然るも我が校友會の一部たる十全會の爲ため
に諸君が奮て一臂の勞を惜まざると其間充分
の餘裕ある手際を示すものとして實に感佩す
るの外なし抑社會の進歩を圖るが爲めに多
數の人相集まりて一の團體を造るにあり而し
て是等の各團體に皆利害の相伴ふものあり
之が衝突は今日社會の現象上に於ける著しき
事實として起りつゝあるなり若し其親睦を全
ふせんあゝ各團體互に一致融和するを要と蓋
し我が十全會も亦一團體あ外ならず従て級の
異なる位地の同じからざるとにより共に利
害の衝突あるや論と俟たゞ斯く利害の存する
間に秩序と立と互に協力和合することは獨り

其團體の能力は歸するものと信ぜ故に會員は
將來此團體を利用して利益を收むると共、お園
地氣候等の關係もつき詳細演説あり孰れも耳新
満ち平滑に諸君の最も敏捷なる主働者とし
らく覺へたり

て多忙の間に巧みに時間を應用し餘裕なき裡
に餘裕と索め務めて本會の
第四席小川教授は子宮外妊娠の一例として最も
平易に尤も着實に妊娠の元理種類につき大畧を

隆盛を致すに吝ならざらん事を希望す云々
述べ本題に入て患者の來歴現症より手術の模様

第二席高松岩吉氏は佝僂病の實見と題し本年夏
に至る迄殆ど一時間半いと懇切演せられたり

期休業歸省の際氏が郷里に於て經驗せる高度の
詳細と次號お譲る(實物供覽)次で十分間休憩點

佝僂病患者もつき遺傳の關係生活の情態現症等
燈の後委員長は京都醫科大學教授鈴木文太郎氏

撮影と示して縷々説明あり詳細は原著欄に譲る
の歸省お際し一場の講話と請ひ一處快く承諾せ

從來講話とし云へば學生と多く控へ勝て獨り
られしを感謝する趣を述べ同氏は拍手喝采の裡

先輩諸君にのみ譲るの傾向ありしが氏と卒先壇
に登壇あり現今獨逸國に於ける學科殊に醫學お

上に快辨と弄して好刺戟と與へたるの吾人の深
於ける教授機關につき流暢に快濶に演じ去る

く感喜する所なり
音甚だ高からせと雖而かも清朗にして語氣の雄

第三席賛成會員竹中繁次郎氏の臺灣談なる演題
勢ある不覺聽者をして奮起とる所あらしめたり

要之掲げて漫録欄にあり

尙山碩主事の講話ある筈なりしも時已お遅く之を聞くこと能くざりしは遺憾ありき右終て委員長閉會を告ぐ時正に午後六時

●校友會運動費 校友會評議會の決議を経て確定せる經常費秋中秋季運動會費は次の如し。

第十二項 秋季運動會費 二〇〇、〇〇〇

第一目 會場費 五五、〇〇〇

第二目 競技費 三五、〇〇〇

第三目 接待費 一七、〇〇〇

第四目 賞品費 五〇、〇〇〇

第五目 衛生費 八、〇〇〇

第六目 雜 費 三五、〇〇〇

●**鵜澤豐吉君**、嚮に醫學得業士の稱號を獲ふれ更に進んで醫學の濫與を探究せんとして、醫科

二年に迫りし君と去る八月歸省中、不幸病魔の胃す處となり、遂に起たず有爲の抱負を齎らして逝かる、同窓知己相諮り、香資を醸し以て、哀悼の意を表せり、

●**松浦關嶽君**、醫科一年に在りて、夙に俊秀の譽あり、將に大に研鑽する處あふんとして、校よ在る僅かに一學期遂に疾を得本年一月溘焉として永眠せらる、哀何ぞ堪えんや、

●**第四高等學校校友會成立** 在來本校諸會合一にして降らず各個各種の目的を以て獨立し來りしが上あ一定の統轄なく其弊動もすれば不規則に流れ不整理の極數多の障害を醸しかくて十分に主旨を遂くる能はず、校友夙に是を患へ普く諸會を抱一して第四高等學校々友會あるものを組織す内あ學術部あり演舌部あり學術部を別ち

て講話部雜誌部演舌討論部語學部等となるの類
凡て一定の規矩準繩の下家庭的和團の内各個の
主旨を全ふせんとするふあり、

校友會規則主旨左の如し

第四高等學校校友會規則

第一條 本會ノ目的ハ第四高等學校職員生徒一

致融和シテ家族的團體ト爲リ徳性ヲ涵養シ學
藝ヲ講究シ身體ヲ練磨シ以テ本校ノ校風ヲ發
揚シ教育ノ資助ト爲スニアリ

第二條 本會ハ第四高等學校校友會ト稱ス

第三條 本會會員ハ左ノ二種ヨリ成ル

特別會員 通常會員

特別會員ハ本校職員ヨリ通常會員ハ本校生徒
ヨリ成ル

但本校ノ卒業生其他本校ニ縁故アル者ハ贊

助會員ト爲ルコトヲ得名譽會員ハ本會特ニ

推戴スルコトアルヘシ

第四條 本會ヲ分チテ左ノ二大部トス

學藝部 運動部

第五條 學藝部ヲ分チテ十全會及北辰會ノ二會

トシ十全會ハ醫學部ニ關係アル會員之ニ屬シ

北辰會ハ大學豫科ニ關係アル會員之ニ屬ス

十全會ハ之ヲ左ノ二小部ニ分ツ

講話部 雜誌部

北辰會ハ之ヲ左ノ四小部ニ分ツ

講話部 演說討論部 語學部 雜誌部

第六條 十全會雜誌部北辰會雜誌部ニ於テ各雜

誌ヲ發刊シ之ヲ十全會雜誌北辰會雜誌ト名ケ

各所屬會員ニ願ツ

第七條 運動部ヲ分チテ左ノ八小部トス

弓術部 劍術部 柔道部 ベー

之ニ代ル

スポーツ部 ロンテニス部 フー

理事ハ會長或ハ副會長ノ命ヲ受ケ會務ヲ整

トボール部 遠足部 漕艇部

理ス

本部ニ於テハ右ノ外別ニ定ムル規約ニ依リ春

代議員ハ其組ヲ代表シ評議會ニ列ス

秋二季ニ於テ大運動會ヲ開ク

書記ハ理事ノ命ヲ受ケ庶務會計ニ従事ス

第八條 本會ニハ左ノ役員ヲ置ク

各小部ノ委員長ハ其部ヲ整理ス

會長一名 副會長一名 理事一名

委員ハ委員長ヲ助ケ其部ノ事務ニ従事ス

代議員若干名 書記若干名

委員長ハ委員ノ中ニ就キ報告委員若干名ヲ

第九條 各小部ニ左ノ役員ヲ置ク

定メ其部ニ於ケル主要ナル事項ヲ雜誌部ニ

委員長一名 委員若干名

報告セシム

右ノ外必要ニ應シ適當ノ役員ヲ置クコトアル

第十一條 會長ニハ本校長ヲ副會長ニハ醫學部

ハシ

主事ヲ推戴ス

第十條 役員ノ職掌左ノ如シ

第十二條 理事委員長及書記ハ特別會員中ニ就

會長ハ本會ヲ總理ス

キ委員報告委員及其他ノ役員ハ特別會員及通

副會長ハ會長ヲ輔佐シ會長事故アルトキハ

常會員中ニ就キ會長之ヲ委嘱ス

代議員ハ各組ヨリ一名宛其組ノ互選ニ依リ之 第十九條 特別會員ハ相當ノ金額ヲ寄附スヘキ

ヲ定ム

モノトス

第十三條 役員ハ一ケ年ヲ以テ任期トシ更任期

通常會員ノ會員ハ一ケ年金壹圓五拾錢トシ之

ハ特別會員ヨリ成リタル役員及代議員ハ毎年

ヲ三期ニ分チ每一期金五拾錢宛各學期ノ授業

九月其他ノ役員ハ毎年四月トス

料ト同時ニ納附スヘキモノトス

第十四條 本會重大ノ事件ヲ協議スル爲メ評議

但數期分ヲ前納スルモ妨ケナシ

會ヲ設ク

賛助會員ニシテ雜誌ノ配布ヲ望ム者ハ其費用

第十五條 評議會ハ理事委員長及委員五分ノ一

ヲ前納スヘシ

并ニ代議員ヨリ成ル但會長ハ必要ニ應シ他ノ

第二十條 領収シタル會費ハ如何ナル事故アル

役員ヲ出席セシムルモノトス

モ返附セス

第十六條 評議會ハ必要ニ應シ會長之ヲ招集ス

第二十一條 本會會計年度ハ毎年九月ニ始リ翌

第十七條 評議會ノ議決ハ會長ノ認可ヲ經テ施

年八月ニ終ル

行スヘキモノトス

第二十二條 本會經費豫算ノ編成ハ每會計年度

第十八條 本會一切ノ經費ハ特別會員及通常會

ノ初ニ於テ評議會ヲ開キ協議ヲ遂ケ會長ノ認

員ニ於テ負擔スルモノトス

可ヲ經テ決定スルモノトス

第二十三條 毎年度ノ收支決算ハ次年度ノ初ニ

於テ雜誌ヲ以テ報告ス
○書記 森川 正名 吉村 政行
永山 一昌 藤井 鏡

第二十四條 本會現金ノ保管ハ會長ニ一任ス
森 俊 山瀬 時吉

第二十五條 本會規則ハ評議會ノ協議ヲ遂ケ會
○代議員 醫四 中西政太郎 醫三 米澤 啓

長ノ認可ヲ經ルニアラサレハ變更スルコトヲ
醫二 土田久三郎 醫一 松田 研吉

得ス
藥三 鈴木仙太郎 法三 二上 兵治

第二十六條 各小部細則ノ變更ハ其部ニ於テ規
文三 森部 孝郎 工三 田中 義一

定シ會長ノ認可ヲ經ヘシ
理三 鈴木 庸生 三三 植村卯三郎

●第四高等學校校友會役員之左の如し
法二 秋田彌之助 文二 駒田 定郎

印ふき者は特別會員にして他は通常會員ありさす又醫
甲二二 長谷川良三郎 乙二二 渡邊福太郎

は醫學部、醫科藥は同藥學科、法は大學豫科法科、文
三二 下田 幸郎 甲一一 手塚 雄

は文科、理は理科、工は工科、三は三部、二は二部、一
一一 安達 欽靖 丙一一 高井竹二郎

は一部ノ畧
甲二二 入江繁太郎 乙二二 岡村 金藏

○會長 北條 時敬
丙二二 稻垣 米門 甲三一 解良 幸吉

○副會長 山崎 幹
乙三一 西山 實淳

○理事 今井 省三

○十全會講話部委員

長 佐々木 達

下平 用彩 金子 治郎

村上 莊太 高山 基重

未近 義介

醫四 中島 擴三 醫三 山崎芳太郎

醫二 片岡 正 醫一 松田 研吉

藥三 鈴木仙太郎

○北辰會講話部委員

長 中野 嘉作 野田 貞

河合 義文 茨木清次郎

明石孫太郎

法三 德田 虎雄 文三 芝田 徹心

工三 廣部德三郎 理三 野村 尙

三一 舟木重次郎

○北辰會演舌討部委員

長 入江 良之 戸田 海市

法三 清水賢一郎 法三 米澤 稔

法二 秋田彌之助

○十全會雜誌部委員

長 小川 勝陳 委員長事 堤 從清

編輯主任 加藤 慶三 務補助 主計 松任 菊治

醫四 河野 勇 醫四 濱口 廣海

醫三 岡島 敬治 醫三 島飼 尹重

醫二 丸山 六郎 醫一 須具璋太郎

藥三 駒屋 禮二

○北辰會語學部委員

長 中俣 匡 村上 珍休

藤井 乙男 長屋 順耳

中目 覺 田部 隆次

村田金太郎

福見常太郎

石川 龍三

法三二上 兵治 法二玉木 葦藏

醫四 關口通太郎 醫二 松村 魁

文三 松村猪久次 文二 乘杉 嘉壽

法三 押原 三吉 工三 田中鷹太郎

○北辰會雜誌部委員

法二 林 慶太郎

長 浦井鐸一郎 宮川熊三郎

○柔道部委員

堀 維孝 武 笠二

長 佐藤 法賢 蒲原 重實

法三 石田 福松 文三 龍山 巖雄

日下庄太郎

理三 鈴木 庸生 文二 森 卷士

醫三 湯本四郎右衛門 醫二 土田久三郎

文二 渡邊 良松

法三 佐々木久二 法二 伊佐 壽

○弓術部委員

二一 植村富五郎

長 櫻井小平太 宮地彦八郎

○漕艇部委員

宮川 爲三

長 谷井鋼三郎 上田 計二

醫四 兒島 亮吉 醫三 早瀬 三求

田中 鍊吉 佐野 安磨

○劍術部委員

長 秦 秀穗 三竹欽五郎

法三 田中 秀知 農三 東郷 直

醫四 村田 讓 藥三 山崎彦太郎

三三三 竹村 榮太

○ベニスボール部委員

長 中日 覺

醫二 井上 隼雄 一三 秋月 致

二二 森谷 精一
丙

○ロンテニス部委員

長 市村 塘

醫二 清水 秀夫 文三 清水 監藏

三三三 柏原 省松

○フットボール部委員

長 杉森 此馬 西田 幾多郎

醫二 辻村 耕夫 法三 金山 秀逸

○遠足部委員

長 磯田 正謙

代議員全体

●醫學科卒業生送別會 十一月九日犀崖古今亭樓上お於て開かる午後六時開會を報ずるや發起人總代中島擴三氏起て開會の主旨を述べ、北條校長次で登壇卒業生諸士に對する希望を述べられ終りに立身の機會と題して

立身の機會は恒に吾人の身邊お流れ來るものよして之を捕ふると否やとは其人の用意如何おあり之と例へば立身の機會は後頭禿にして唯だ前頭よのみ毛を有するものと見るべし彼既お我よ其背を向くるお當りてや如何に是と獲むとそるも轉滑して捕ふるよ處なし「我の能と以てするも未だ一つの機會なきが爲よ立身の途を得せ」など、嘆とるものと畢竟自家準備の不足なるにあり云々

續て山碕主事は輕快おる口調を以て例と「分婉

の難易」は假り坦々たる語勢の中時々機語を装ひ懇々卒業生諸氏に告諭せらるゝところあり各級總代としては第三年湯本四郎右工門、第二年増田貞吉第一年小池宇一の諸氏滿腔の赤誠と捧けて離別の辭を述べ終りお卒業生總代河内鑑と治郎氏の答禮あり尙田上清貞氏と卒業生一同に代りて各自所藏書籍若干を醫學部圖書館へ寄贈するの旨を述べらる

其他宮井勇河野勇富野佳照田中秀夫森井喜三次郎高田範圍の諸氏踵を連ねて續々として壇へ登る酒盃既ふ到りて演者尙盡きず其間數發の烟火轟然として虚空に響き紅球數千犀川の流へ映し壯觀日はん方なし沿歌長吟陶然たる清酔の裡卒業諸士の光榮を祝して散會せしこ午後九時なり

き

● 卒業證書授與式 第五回卒業證書授與式と十一月十日午後一時本校講堂に於て舉行せらる來賓としては志波石川縣知事を初め文官高等官陸海軍高等官縣立各學校校長卒業生保證人等の臨席あり順定まりて北條校長河内鑑次郎氏以下順次に卒業證書授與し了りて卒業諸君お對する告諭と朗讀し次て山岡主事例により學年報告を爲し滿腔の希望を述べ懇々訓誡せらるゝところあり

續て醫學科卒業生總代河内鑑次郎藥學科總代中川鯉太の両氏相次て最と嚴肅に答詞を朗讀し午後二時式を終ゆ

當日卒業證書を授與せられたる諸君左の如し

醫學科十八人 (醫學得業士)

河内鑑次郎 (石川) 田上 清貞 (富山)

吉川 砥直 (新瀉) 大塚 正一 (岡出)

千葉 玄也 (福井) 武田 正壽 (福井) ○武田正壽、吉田幡誠、大西瀨治の三君と海軍

深見貞之助 (福井) 太田 精一 (石川) 少軍醫候補生受験の爲來る廿一日當地出發の筈

吉田 幡誠 (石川) 望月 慶作 (静岡) ○千葉玄也君 不日自宅開業の筈

小川 爲吉 (石川) 榊原 久 (福井) ○太田精一君 東京永樂病院へ赴任の筈

大西 瀨治 (石川) 新谷 新吉 (石川) ○田上清貞君 不日東京へ勉學の爲赴かる、由

橋本喜久三 (石川) 沼田外太郎 (富山) ○深美貞之助、望月慶作、吉田砥直、内山忠二

天野孝太郎 (廣島) 高杉 多齋 (石川) 郎の四君は一年志願兵として聯隊(未定)へ入營

藥學科 三人 (藥學得業士) の筈

中川 鯉太 (新瀉) 内山忠次郎 (岐阜) ○新谷新吉、小川爲吉、榊原久の三君と多分金

池田兵次郎 (石川) 澤病院に入ふる、ならん

右諸氏の方向は次の如し ○高松多齋 北海道函館にて開業の筈

○河内鑑次郎君、橋本喜久三君 豫て委托生の ○沼田外太郎、天野幸太郎君 不日勉學の爲東

故と以て不日第九師團へ見習醫官として入營 上の筈

○大塚正一君 未だ不定なるも多分金澤病院へ ○中川鯉太君 自宅ふ於て開業

出務の筈 ●書籍惠與 教授下平用彩氏は今回自著外科汎

論一部宛を醫學科第二年級四十八名へ惠興せら

任ヲ命ス

佐々木 達

る

醫學部皮膚病及黴毒病學ノ教務ヲ囑託ス

● 書籍雜誌寄送 第十二回醫學科卒業生諸君と

中野 玄次

今回校と去るに及びて各自所藏の書籍雜誌類若

依願囑託ヲ解ク

東 良平

干を割愛して醫學部圖書館へ寄送せらる(詳細

囑託ヲ解ク

水野富次郎

報告は次號に讓る)

依願解雇

石森 國臣

● 叙任辭令(八月一日以後)

九月四日

八月四日

教務囑託ヲ解キ更ニ講師ヲ囑託ス森島 彦夫

三級捧下賜 第四高等學校教授 高安 右人 全十三日

四級捧下賜 第四高等學校教授 山碕 幹 雇申付(醫學部病理副手ヲ命ス)

若林 周三

五級捧下賜 第四高等學校教授 佐々木 達 時習寮醫員依願

津川 恒

六級捧下賜 第四高等學校教授 金子 治郎 全七日

醫學部事務補助ヲ命ス 末近 義介

醫學部眼科室通常用備品消耗品監守及取扱主

任ヲ免ス 高安 右人 全二十七日

醫學部眼科室通常用備品消耗品監守及取扱主

依願副手ヲ免ス 田代 保二

十月七日

藝備醫事

全

藝備醫學會

醫學部內科教務ヲ囑託ス

藤井 助雄

中央醫學會雜誌

全 同會

全藥物學小兒病學教務ヲ囑託ス

田代 保二

一高志林

全 第一高等學校々友會

十月十日

校友會雜誌

全 京都醫學學校々友會

陸叙高等官四等

教授 櫻井小太平

研瑤會雜誌

全 第五高等學校同會

●寄贈書目

助産ノ栞

全 緒方病院助産婦學會

日本醫事週報

每號 同社

緒方病院醫事會報

全 同研究會

醫海時報

全 同社

公衆醫事

全 同社

岡山醫學會雜誌

全 同會

井上眼科同窓會々報

全 同會

京都醫事衛生誌

全 同社

成醫會々報

全 同會

北越醫學會雜誌

全 同會

廣島衛生醫事月報

全 同社

京都醫學會雜誌

全 同會

日本助産婦新報

全 新瀉高橋產婆學校

中外醫事新報

全 同社

齒學研鑽

全 富安齒科治療所

順天堂醫事
研究會雜誌

全 同會

猿化牛痘苗ノ研究

一部 野田忠廣氏

日本眼科學會雜誌

全 同會



●雜錄

九十五